

「日本語教育の参照枠」の取りまとめの背景

1. 我が国の外国人及び日本語教育の現状

近年、世界中で国境を越えた人の移動が進む中で、複数の場所や教育機関の間を移動しながら日本語を学ぶ人が増えてきた。

また、進学や就職、在留資格を得るために日本語能力の証明が求められるようになってきている。



【参考】 ・我が国の在留外国人 約358万人(令和6年6月)
・我が国の就労外国人 約230万人(令和6年10月)
・海外の日本語学習者 約379万人(令和3年度)

2. ユーロッパ言語共通参照枠(CEFR)と活用状況

- ・欧州評議会によって2001年に公開され、40以上の言語に翻訳。
- ・言語資格を承認する際の根拠としても活用可能であり、国境や言語の枠を越えて、教育や就労の流動性を促進することにも役立てられている。
- ・ヨーロッパ各国では、移民や労働者の受入れのための言語教育や言語能力判定試験の基準に用いられている。
- ・欧米だけでなく、アジアにおいてもCEFRのレベルなどを活用した各国語能力の判定試験が実施されている。

「日本語教育の参照枠」はCEFRを参考にしているため、国際通用性が高く、言語や機関間の共通の指標で日本語能力を示すことができる。

3. 「日本語教育の参照枠」の概要

(1) 理念

①日本語学習者を社会的存在として捉える

・学習者は「新たに学んだ言語を用いて社会に参加し、より良い人生を歩もうとする社会的存在」である。

②言語を使って「できること」に注目する

・言語知識を持っていることよりも、その知識を使って何ができるかに注目する。

③多様な日本語使用を尊重する

・学習者の目的に応じた学習目標の設定を重視する。
・必ずしも全て学習者に母語話者と同等の日本語能力を求めない。

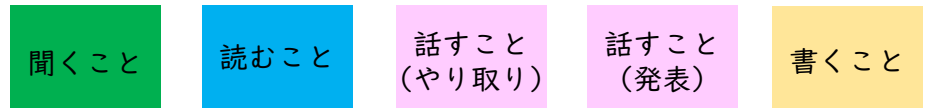
共生社会の実現に寄与することを目的とした日本語教育

(2) 主な構成(全体的な尺度・五つの言語活動・Can do)

●全体的な尺度 CEFRを参考に、日本語能力を六つのレベルで提示。

基礎段階の言語使用者		自立した言語使用者		熟達した言語使用者	
A1	A2	B1	B2	C1	C2

●五つの言語活動 従来の言語技能を「言語活動」と位置付け、四技能(聞く、読む、話す、書く)のうち、話すを「やり取り」と「発表」に分け、提示。



●言語能力記述文 言語活動ごとに、日本語での行動を「～できる」という形で示した言語能力記述文(Can do)を用い、学習対象となる内容を言語知識ではなく、具体的な行動として提示。学習目標等に活用できる。

【話すこと(やり取り):A2レベル】

ごみの捨て方や喫煙できる場所など地域でのマナーについて、短い簡単な言葉で近所の人に質問したり、質問に答えたりすることができる。

【話すこと(やり取り):B1レベル】

近所の人とごみの出し方などの問題が生じたとき、自分のごみの出し方についてある程度詳しく状況を説明し、苦情に対応することができる。

「日本語教育の参照枠」の概要

日本語の学習・教授・評価を考える際に必要になる、日本語のレベルを示した全体的な尺度と、「聞く」「読む」「話す(やり取り・発表)」「書く」の言語活動別に実生活において日本語を使ってどんなことができるかを表した言語能力記述文(Can do)を示すことを主とする。その他、漢字を含む文字の扱いや日本語能力評価についての考え方等も含む。

全体的な尺度(抜粋) (日本語能力の熟達度について6レベルで示したもの)

言語使用者 熟達した	C2	聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。自然に、流ちょうかつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流ちょうに、また自然に自己表現ができる。社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。
言語使用者 自立した	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、具体的な話題でも抽象的な話題でも複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで熟達した日本語話者とやり取りができるくらい流ちょうかつ自然である。
	B1	仕事、学校、娯楽でふだん出合うような身近な話題について、共通語による話し方であれば、主要点を理解できる。身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結び付けられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。
言語使用者 基礎段階の	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。

・ 各レベルについての説明は、CEFR日本語版(追補版)の訳文を基にし、CEFR補遺版を参考に一部修正を加えた。

「日本語教育の参照枠」の構成

